

幼児の自我形成における 遊びと生活活動の意義と内容について

野原 由利子, 倉田 左恵子, 小牧 和美

The Meanings and Contents of Plays and Activities in Ordinary Life
in Children's Formation of Self-consciousness

Yuriko Nohara, Saeko Kurata, Kazumi Komaki

1 研究の目的

0歳から1歳半の時期は、大人に対する信頼感の中で、自己活動を展開しながら自分を認識、発見していく自己活動充実期である。1歳半から3歳の時期は、自我が芽生え、拡大する時期で、この期に子どもたちは要求主体としての自分を育てていく。3歳から4歳の時期は、幼児前期に発達した「自我」の上に、「第二の自我」＝「社会的自己」、「社会的存在としての自分のあり方」を誕生させていく。4歳から6歳にかけての時期は、「自我」と「第二の自我」との間で、自己内対話が可能となり、自我世界が直接他者、外界と対峙するのではなく、一度自分の中で関係を調整した上で向い合える、自ら選択し、判断する主体に育っていく時期である。

乳幼児期6年間で子どもがものや人とのすさまじいぶつかり合いをくぐって自分のものにしていく「自分」の構図は、児童期、青年期そして成人になっても基本的に維持されることとなるため、「乳幼児期は人格の基礎を形成する時期」といわれるほど重要な時期である。

今日、一方では「第一の自我」が抑圧されてひよわに委縮している子ども、又他方では要求主体としての「第一の自我」ばかりが肥大して、「第二の自我」が育てられておらず、自己抑制、自己コントロール力がついていない子どもたちの存在も目立っている。

乳幼児期6年間において、どのような家庭の子育てや、保育園、幼稚園での集団保育を受けることで「自我」と「第二の自我」をバランスよく育てていくことができるのであろうか。

自我の形成における遊び活動の意義については、先行研究もあり^(註1)、筆者も拙論を本学紀要27号、28号にまとめている^(註2)。しかし、もう一つ見逃されている生活活動も、乳幼児の自我を育てる上で大きな役割を果たすのではないだろうか。生活活動を単なる社会への適応を目指して、大人がおしつけるしつけととらえるのではなく、モンテッソーリが幼児期に重要な活動として位置づけた「**実際生活の練習**」^(註3)の内容、方法に学びながら、日常生活活動の自我形成にもつ意味について考察し、幼稚園と家庭における実践例によって一つの検証を行って

ることを本稿の目的としたい。

② 子どもの自我形成における遊び活動の意義と内容

1) 0～1歳半

乳児は、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの五感を働かせながら、外界の探索をはじめ、又その中で五感の機能を鋭敏にきたえていく。やがて手、足、指の力もついてきて、ものや人にかかわりながらそれらの機能が高まる中、首のまわりの筋肉、腹筋、背筋も発達していくことにより、ねがえり、這い這い、座位、立位、歩行などを獲得していく。この時期は感覚をきたえ、運動機能を高めるような、自分でさわってかかわれる素材や玩具を環境の中におくことが大切であるし、又親や保育者の働きかけによる遊びが必要である。こうした遊びの中でもものや他者の存在にも気づき、自分の体や動きについての自覚、把握が可能となり、自己意識が芽生えてくるのである。それは自分の名前をよばれて自分のことであることがわかる時期とも呼応するのである。

2) 1歳半～3歳

この時期は感覚、運動遊びが益々活発になり、発達上重要な時期であるが、ものや他者への認識が深まる中で、「つもり」や「みたて」も可能となってくる。このイメージの誕生＝眼前にないものの想起は、他者の気持ちを思いやる力の出現を可能にする上で、第二の自我形成の上でも重視すべき事象である。こうしたつもり遊び、みたて遊びをこの時期に大切に育てる必要がある。

3) 3歳～4歳

この時期は動物や物語の登場人物などになりきって遊ぶつもり遊びがよく現れ、子どもどうしでかんたんなごっこ遊びもできるようになっていく。ごっこ遊びの中で一度なった役を守ってその役になって遊びこむなどルールに従う力が自然に培われていく。又、この時期はブロックや積木などなにかにみたてて遊ぶ構成遊びも好んで行われ、新聞、広告紙、折紙などで剣や飛行機や腕時計などかんたんな製作遊びも盛んである。友だちやものと格闘する中で、社会のきまりやもののもつ性質、手順に従うことの必要性についての認識が身についていき、第二の自我＝社会的自己の形成がはかられていくのである。

4) 4歳～6歳

この時期は自我と第二の自我との間で自己内対話ができるように保育者が導く時期である。その為友達との自然でゆたかなかわりのできる役割遊びやルール遊び、ものとしっかりとかかわってとりくむ構成遊び、つくる遊びなどを十分経験することが大切である。5歳から6歳期の構成遊びやつくる遊びは個人だけでなくグループによる共同活動にとりくむことも、協力するよるこびや集団の力を認識する上でも大切である。劇遊びも自己をしっかりとちながら他者になりきりその上で協力しあうことを要請されることから自我と第二の自我との自己内対話を育くむ6歳期の大切な遊びである。

③ 子どもの自我形成における生活活動の意義と内容

②にみてきたように、子どもが自主的に自然に好んで行う活動である遊びは必然的に子どもどうしの交流を自然にもたらすものであり、ものや人とのかかわりをゆたかに保障するものとして、子どもの自我形成にとって必要不可欠な活動である。しかし子どもの生活は遊びだけではなく、生活活動や人類が蓄積してきた文化の基礎的部分を少しずつ学びとっていく学習的な活動の分野もあり、第二の自我形成には、自分が自分の行動、生活の主人公になっていくことや、対物、対人、対自己に対する認識が深まっていくことも必要であることから、これら生活活動や学習的活動がもつ意義についても考察を深めることが重要であると考えられる。

一般的に生活活動というと生活習慣の形成とかしつけというように、社会的適応の視点からだけとらえられやすいが、生活活動のもつ自我形成上の意義について考察し、続いてどのような内容の活動が保障されるべきかについてモンテッソーリ教育の提起している内容を検討してみたい。

1) 日常生活活動を可能にする精神的発達の根拠

1歳ころになると、自分の思いを「イヤッ」という最も単純なことばで表現することが出てくる。やがて「ジブンデ、ジブンデ」という自分が自分の行動の主人公になりたいという思いを盛んに表現するようになる。この時期の要求に保育者がいていねいに応えてゆくことが、生活活動を自ら行っていける力をつけていくことになる。又、1歳前後から周囲の環境の中の、順序や場所、所有物そして習慣についてこだわりを示しはじめるが、これは乳幼児が環境を理解していくため、既知のものを羅針盤にしなが、少しずつ認識活動を行っていく姿である。この秩序感こそ、ものを順序よく扱ったり、もとの場所にもどすなどの行動ができる発達の源泉である。これはやがて、ものを比べたり、対にしたり、段階づけたり、同じものを集めたりしていくなどの、外界を整理しながら認識したり、法則性をみいだしていくなどの高度な人間の認識活動＝科学的認識活動の源泉といえるものであろう。このように子どもはきわめて幼いときから、秩序感を育てていることは、まだ一般的に重視され、保育に活かされている状況にはない。むしろ子どもは混沌とした状況認識しかなく、社会的適応の為に大人がしつけていく必要が強く認識されており、子どもの興味の状況を無視しておしつけられるため、生活活動は子どもと大人にとって義務的な重苦しいものにとらえられてしまいがちなのである。乳幼児にみられる「秩序」への感性はモンテッソーリが子どもたちの観察によって発見した特徴である。

モンテッソーリ教育では、上記2つの「ジブンデ、ジブンデ」と何でも自分でやりたがったり、順序、場所、所有物、習慣などにこだわる秩序感があるなどの発達の特徴期をとらえ、日常生活練習を次の四つの分野に分けて重視している。その四つとは①基本的運動、②他人への配慮、③環境への配慮、④自己への配慮である^(註4)。

2) 日常生活活動の自我形成における重要性

日常生活活動が少しずつできていく中で育つ力として主として次の三つが考えられる。

一つめは随意筋運動の調整である。随意筋運動には①体全体を使った大きな動き、②バランス（平衡）感覚を身につける動き、③手と腕の目的に合わせた動き、④指の目的に合わせた動き などがあり、幼児はこれらの動きを好んで行うが、この中で随意筋を調整して、自分が自分の行動の主人公になることを獲得していくのである。

二つめは自己意識の形成である。自分が自分の行動の主人公になることによって自信と意欲が生まれ、強固な自己意識、自我が育つことになる。大人が日常生活活動を子ども自身が獲得していくことを重視しないで、代行してしまう場合、子どもは行動の主人公になることを妨げられ、自信のない、ひよわな自我にとどまってしまうことが多い。

三つめは、自己抑制、自己コントロール力の獲得である。生活行動の獲得は、自由きままに動きまわったり、やめたい時にはやめてしまえる遊びとはちがいで、一定の目的達成を課題としてふくんでいるものである。ねばり強く、くり返し挑戦しなければ身につかない行動も多い。それ故、生活活動に興味をもち、自分でできるようになることを切望する年令からていねいに生活活動にとり組んでいく中で、集中力と自己調整力を養っていけるのである。遊びに夢中になる中でも、随意筋を育て、行動力をつけ、自我と第二の自我を育てることも可能であるが、目的、課題が的確であり、それにとりくむことによって結果が示され、達成感、満足感も得ることが多い生活活動は、幼児期の「自我」と「第二の自我」=社会的自己の形成には、更に大きな役割を果たす活動であると考えられる。一般的にはまだ社会生活への適応の為にしつけていくものとして考えられている生活習慣の形成を、子どもの発達に必要不可欠な生活活動としてとらえ、自我形成の視点からとらえかえしてみることは、今日の重要な幼児教育の課題の一つであろう。

3) 日常生活活動の内容

基本的運動としては、歩く、座る、立つ、持つ、運ぶ、置く、しぼる、あけ移す、注ぐ、切る、貼る、折る、縫うなどの活動。他人への配慮としては、戸の開閉、あいさつ、返事、人への接し方、感謝とおわび、人とのものの受け渡し方、咳、くしゃみ、あくびのマナー、外遊具の使い方、マナーなどの活動。環境への配慮としては、はく、ふく、せんたく、花の水切り、庭の仕事、食卓の準備、植物や小動物の世話などの活動。自己への配慮としては、鼻のかみ方、持ちものの始末、こぼす、落とすの始末、鏡をみでの整姿・整髪、衣類・靴の着脱、手洗い、くつの手入れなどの活動などが考えられる。保育者がこれらの動作を日常生活の中でていねいに示範したり、くりかえしとりくめる教材、用具を十分用意し、子どもたちが満足できるまで練習し、最終的には日常の生活を自分の力でできるようになっていくことをめざすものである。

自我の発達に合わせたカリキュラムは別表1に整理してみた。

4) 日常生活活動の練習方法

多くの日常生活活動練習の中で、年令や月令にあい、必要と思われるいくつかの活動を、練習しやすい教材や用具にして複数用意することが大切である。幼児は用意されている複数の活動の中から、自分が興味をもったものを選びとること、興味が続くまでくり返し行えること、

表1 自分づくりににおける遊びと生活活動のキャリアラム

年令	自我の形成過程	遊び(自主的探索、想像、創造活動) 感覚、運動遊び	日常生活活動			
			基本的運動	他人への配慮	環境への配慮	自己への配慮
0カ月	自己活動充実期 = 大人に対する信頼感の中で、自己活動を展開しながら自分を発見していく時期。	つもり、みたて遊び	歩く、坐る、立つ、待つ、運ぶ、置く、しぼる、あけ移す、注ぐ(水、色砂、米)、切る(紙)、貼る	戸の開閉、あいさつ、返事、人への接し方、感謝とおわび、人へのものの受け渡し方、咳、くしゃみ、あくびのマナー、外遊具の使い方、マナー	はく、ふく	鼻のかみ方、持ちものの始末、こぼす、落とすの始末、鏡をみる、髪をとかす、衣類の着脱、靴の着脱、手洗い
1歳	自我の誕生、拡大期 = いわゆる自我の誕生から、自我が拡大する時期。この時期子どもたちは、要求主体として自分を育てていく。	かんたんなごっこ遊び、ルール遊び、構成遊び、つくる遊び	折る(布、紙)、切る(野菜)、縫う	お茶のすめ方、集団遊びのルール(話のきき方)	せんたく、アイロンかけ、花の水切り、庭の仕事	くつの手入れ(ズック、長靴あらい)、線上歩行、静粛練習
2歳	自己内対話成立期 = 自我と「第二の自我」との間で自己内対話が可能となり、自我世界が直接他者・外界と対峙するのではなく、一度自分の中で関係を調整した上で向い合える、自ら選択し、判断する主体に育っていく時期。	役割遊び、構成遊び、つくる遊び、ルール遊び、劇遊び など			食卓の準備、植物栽培、小動物の世話	

教材、用具には必ず何らかの達成感がふくまれていること、失敗した場合、誤りの訂正が自分で可能となるよう配慮されていることが必要である。そして選んだ活動にくり返し取り組む中で、子どもは集中現象を呈し、脳と感覚神経、運動神経回路ができ、自分自身で、“できた” “やった” という達成感・満足感が生れ、又次の活動への意欲となっていくのである。自由選択 繰り返し 集中 達成感・充実感を得る中で、自信にうらづけられた自我が強固に育ち、又自己コントロール力も育つのである。やればできるといういわば学習の主体意識が育つことが肝要で、おしつけられたしつけを受けるだけでは、自信にうらづけられた自我の形成は、はかられていかないのである。

④ 日常生活活動の中で自我を育てる子どもの姿

(1) 幼稚園での実践事例

では、実際に日常生活活動をていねいに保育の中で展開した場合、子どもたちはどのような変化を示していくのだろうか。少しずつモンテッソーリ教育の思想、内容、方法を取り入れはじめている大阪や愛知の一般的な幼稚園での倉田左恵子（モンテッソーリ教師資格保持者）の実践事例を検討してみる。

幼稚園での日常生活活動のとりくみと自我の育ち

事例1、くつ箱にくつを入れる（K園、入園前の準備クラス）

登園してきた子どもが、くつ箱の前でもたついていると、待ちきれずに手を出してしまうお母さん。大人が代行してしまうことが目につく。教師がくつ箱へのくつの入れ方をゆっくりと順序を追って見せてやる。

1．くつを揃える。2．くつを揃えて持つ。3．くつ箱に入れる。くつ箱の奥まできちんと揃えて入れるよう「奥までトン」という。

教師がするのをじっとみていた子どもが「ぼくもやってみたい！」と言って、教師がしてみせたのと同じ様に一連の動きにじっくりと取り組んでいる。くつ箱の奥まで「トン！」ときれいにくつを入れることが出来ると満足した表情である。くり返し、出したり入れたりする子どもの姿も見られる。

事例2、おやつを戴く（K園、入園前の準備クラス）

新入園の3才児クラスのおやつの時間は、以前、教師が一人ひとりの子どもにお菓子とお茶を配って回っていた。皆に配り終えるまで待たないで食べてしまう子、お茶をこぼす子どもと全体に落ちつかず、じっと座って食べることも難しい状態であった。教師もバタバタと動き回り、子どもに大声で注意することが多かった。

そこで入園前の準備クラスで、子どもが喜んでひとりのできる日常生活活動を充分にとり入れたおやつの時間を実践してみた。

1．お皿を運び、丁寧に置く。

幼児の自我形成における遊びと生活活動の意義と内容について

2. バスケットの中のお菓子（ビスケット、せんべい、ラムネ等）を教師が入れてみせた数だけ、トングで取って自分のお皿に入れる。

この時「どうぞ」「ありがとう」「どういたしまして」「お先に」の言葉を交し合い、人への接し方と感謝する気持ちを自然と身につけていくようにする。

3. 皆がとり分けるまで静かに座って待つマナーを身につける。

4. 食べ終わったら、お皿とコップを一つずつ両手で持って運ぶ。元の場所に片付ける。

お皿をプラスチック製のものから本物の陶器のものに変えると、丁寧に扱ったり、運ぶ様になり、自分で自分のからだをコントロールする姿がみられる。片付けたお皿とコップも教師が何も言わなくてもきれいに一列に秩序正しく並べられている。またおやつが終わると、落ち着いて次の活動にも移ることができる。

事例3、縦割り編成にしてのランチタイムの実践（K園、3、4、5才児クラス）

年長クラスの子どもたちに「小さいお友だちに優しくしてあげましょう、助けてあげましょうね」と言っても、子どもたちはどうしたらいいのか、小さい子どもたちへの関わり方が解らない様である。年下の子どもと関わる経験が乏しい故であることが考えられる。そこで、園の中で縦割りのクラス編成をし、年長、年中、年少児との交流の場としてランチタイムの実践を行ってみた。それぞれの年令の子どもが自分でできることを尊重し乍ら、年長児、年中児が手助けできること、当番活動等を子ども達と一緒に考え楽しい交流の時間を工夫してみた。この活動の中で「拭いてあげようか？」「入れてあげようか？」と年長・中児が声掛けしたり、また「～してください」と年少児が年長児に頼む姿がみられ、「ありがとう」「どういたしまして」の言葉のやりとりも自然な形で気持ちよく交されていた。

この実践を始めた当初、担任がいつもと変ったり、異年令の子ども達が一緒という新しい環境の中で不安になって泣き出す子もいたが、回を重ねることにより、縦割りのランチタイムの時間をたのしみにする様になった。また、遊びの中でも園庭で他の学年の中へ入って遊ぶ姿が見られる様になり、園の中で自然な形で小さい子をいたわる姿が見られ、積極的に異年令で交流するのを楽しんでいる。

事例4、お茶をいただく（T園、5才児クラス）

一斉活動では教師の話をよく聞いて熱心に活動にとり組んでいた子どもたち。活動を終えてお茶をいただく時間になると、クラスの中が何となく落ち着かない雰囲気になる。

教師が大きなやかんから、コップに次々とお茶を入れていく。子どもたちはそれぞれに教師のところに来て片手でお茶を運んでいる。席に着いて、あっという間に飲んだかと思うとコップを洗いにバタバタと走っていく。この間、クラス全体は何となく落ち着かない雰囲気でお茶をこぼしても気が付かず、後始末もできない。

“お茶をいただく”という活動の中には、次のような日常生活で身につけるべき大切な活動が含まれている。それは、運ぶ、注ぐ、人への接し方、感謝、拭く、こぼした時の始末等。これら日常生活活動を子ども主体の自己活動として、次のようにとりいれてみた。

1. 子どもサイズの小さめのやかんでお茶を注ぐ。
2. コップに入れたお茶をトレーで運び、友だちにすすめる。
3. お互いに「どうぞ」「ありがとう」「どういたしまして」の言葉を交わし合う。
4. トレーを使って片付ける。

お茶を運んでいる子どもも、自分のからだをコントロールしてゆっくりとした足どりで慎重に運んでいる。サービスを受ける子どもたちも静かに、落ち着いて待つことができる。子どもたちもこの活動を行動の主人公になって満足してたのしんでいる様である。

これら日常生活活動を通じて、子どもの中に注意力、集中力、秩序感、順序性、清潔感、独立心、社会性が育かれ、人格形成の大切な基礎がつくられていっている。

事例5、鼻をかむ

3才児のHには、2才年上の兄のTがいる。何時も兄の友達と一緒に遊んでいるので、Tのことは同じ仲間感覚なのである。Tと何でも同じ様に出来ると思っており、また同じでないと感じに入らない。何事に於ても「ボク、知ってるねん」「ボク、自分で出来るねん」と気ばかり走り、ゆっくりと落ち着いて人の話しが聞けず、先に手が出て、出来ないとパニックになる。

ある日、ズルズルの鼻を手で拭っていたので、「上手にお鼻をかむのを教えてあげようか？」と声を掛けると、「でもボク、自分でできるねん」と自分でやり出す。しかし上手に出来ない。「Hくん、よく見ててね」と前に座らせてゆっくりとやり方をみせ始めるとじっと見ている。ティッシュペーパーを二つに折る。更に四つ折りにする。鼻を片方ずつかむ。更に二つに折る。鼻をきれいに拭きとる。この様に、順序を追いつつゆっくりと動きを分析してみせてみた。続いてHがティッシュペーパーを二つに折るところから神妙な顔つきで集中してとり組み、何度か繰り返すうちに「ボク上手に出来たよ！」「ひとりでできたよ！」ととても嬉しそうな顔をして見せにきた。その後、続いて折り紙を折り始めたが、今までとは違ってとても落ち着いて、折り線を指先で何度も丁寧に押さえて、黙々と活動を繰り返していた。

鼻をかんでもらったり、上手にできなかったのを直してもらうのではなく、本当は自分でできるようになりたい、気持ち良くきちんとできるようになりたいと望んでいたH。Hは、意志力とくり返しによって、完成された動きを身につけることができたのである。その表情はとても穏やかであった。自分のことが一人できちんとできるようになると、自然と他人に対しての優しさ、思いやりの心が芽生えてくる。Hの友だちとの関わり方にもよい育ちが日々みられるようになった。

(2) 家庭での子育ての事例

④の(1)では幼稚園での実践事例をみたが、家庭でも日常生活活動はとりくまれており、少し工夫することで、自己活動が活発になり、しっかりと自我と第二の自我を形成していっているようすを、愛知江南短期大学付属幼稚園の園児の保護者であり、ともにモンテッソーリ教育について学んでいる小牧和美の実践事例をまとめてみる。

家庭での日常生活活動のとりくみと自我の育ち

娘誕生～1歳

純粹に子どもの健やかな成長を願い、また娘も両親に対する信頼感の中で自己活動を展開していった。タオルで遊ぶ、ティッシュを箱から一枚ずつ取り出す、「穴」を見つけると、その穴の中に物を詰める、本の中のページをぐちゃぐちゃにする等々である。しかし、小さいながらも芽生えてきた好奇心に対し、私は上手く対応できず、「困ったものだ」と一部排除してしまったことがあった。例えば、「ティッシュがもったいないから」「本が破れるから」と各々高い所に置いたり、小さな穴は予め穴を塞いだりしていた。彼女のこれらの行動は、単なる好奇心ではなく彼女の自然な発達の第一段階であり、体（指先、触覚等）の発達や、満足感を得るものだったのである。小さな子どもなので、危険に対しては周囲の大人が十分に注意する必要があるが、発想の転換1つで、例えば、彼女専用のティッシュ箱を用意し自由に使わせる、又、読み終えた雑誌で遊ばせる、広告を使って本にする等、活動の要求に対して応えてあげることができるはずであった。私はこの頃から、彼女の自然の法則に従った発達を妨げていたのかも知れない。

娘1歳～2歳

自分で自由に動くことができ、周囲の環境との関わりをもつようになった。多くのものに触れさせる為、天気の良い日はできるだけ外に出て、蝶が飛んでいれば「ちょうちょ」の唄を、チューリップが咲いていれば「さいたさいた」の唄を歌った。葉が風で舞っていれば体で表現したり、ハトの歩き方の真似をしてみたりもした。私は、彼女自身の行動が「感性」「知性」につながるものに対しては積極的にとりいれていたが、日常生活についてはあまり関心がなく「大人がやってしまった方が早く済む」という気持ちもあった。食事の前の手洗いも、私の真似をして洗面所で背伸びして蛇口をひねろうとするのだが、「服がぬれるから」と、おしぼりで手を拭いてあげていた。「自分で、自分で」と、彼女はよく言っていたが、時間がかかったり、手間がかかったりする事は、私がしていた。じっくりと待って見守ってあげなかったり、またお手本を見せないで一人でやらせて、失敗すると「ほらごらん」と叱ったりしたこともあった。下駄箱の中の履き物を全て玄関のドアの外の通路に並べたこともあったが、「何をしているの。邪魔になるから片づけるよ」といって、物事の秩序感が表れたことに対しても気づかずにいた。娘の気持ちを無視して片づけると、当然泣いて怒る。そのことを「反抗期である」と間違った解釈をしていた。

彼女は自分の欲求が満たされず、行動も認められず、自我を形成していくどころか、逆に、大事なことが欠けたままこの時期を過ごした。その為か、娘はイライラしたり、大きな声で騒いだりすることが多く見られた。

娘2歳、息子誕生

周囲の目は生まれたばかりの息子に注がれた。息子がよく眠っている時は、娘と二人だけで公園に出かけた。花壇の花の名前を言ったり、ジャングルジムの高い所から飛び降りたりと、

興味のある分野や、自由遊びの分野では発達が見られたが、人との関わりが、どうもうまくいかない。母親に一番大切な部分が認められず、達成感、充実感も中途半端ななかで、友達と関わる余裕がないのも、今思えば当然である。砂場にままごと道具を持っていくと、それを見て他の子が寄ってくる。「貸して」と言う子もいれば、黙って持って行ってしまう子もいる。「貸して」と言われ、娘の返答を待たずして「貸してあげなさい」と言い、黙って持っていく子に対して、叩いて取り返してくると「どうして人を叩くの！叩いちゃいけないでしょう」と、他の母親達の前ということもあって、自分をよく見せようと娘を叱ったこともあった。「貸して」と言われ、今自分が使っているものをすぐに貸せないのは当然のことである。ましてや黙って持っていかれたら、叩きたくなるかもしれない。このような時、もっと娘の気持ちを理解し、娘に発言を任せたり、上手に表現できない時は、娘の気持ちを聞いて代弁したりしていれば、そのことで自分の気持ちが認められ、自己抑制心が形成されていくところだろうが、私にはそれすらできなかった。公園に行き、今から遊ぶという時に、入口のところで1時間位大泣きしたことがある。その理由が当時はわからなかった。

息子は日々大きくなる。二人目という余裕もあって、神経質にならずに接することができた。息子も娘と同じようにティッシュを箱から全部取り出したり、穴を見つけると、そこに物を詰めたりしていた。この時初めて「赤ちゃんが大きくなる時は、皆同じようなことをする」ということに気づいた。

娘3歳、息子1歳

娘が幼稚園に入園した。そこはモンテッソーリ教育を行っている園であったが、「モンテッソーリ教育」がどのようなものか知らずに入園させた。制服が決まっていたので、それに似合うブラウスを着せ、リボンのかわいい靴を履かせ、お弁当箱も全て新しいものを買って持たせた。ところがある日、園長先生から新入園児の母親の呼び出しがあり、注意を受けた。「お弁当箱でお弁当を食べることが初めてなのに、使いこなせないお弁当箱はやめなさい。ブラウスは着脱しやすいものか、靴は自分で履けるものか、日常の基本的な生活ができないのに園での集団生活は出来ない。自分自身に余裕がないのに友達との良い関係を望んではいけない」という内容であった。まるで自分が注意を受けている様であった。同時に、娘の発達の芽を摘んでしまったことに対する謝罪の気持ちで一杯になった。すぐに、今後自分はどうしたらよいのかアドバイスをいただいたところ「生活環境を見直すこと。娘をよく観察し、成長を信じ、全人格を受けとめること」の実行をすすめられた。

息子には同じ誤ちを繰り返さないよう心掛けた。夫の本棚の本を全部出して部屋に一列に並べた時、「わあすごい。きれいに並んだね、本の道ができたね。今度はお片づけも上手にできるかな」と言うと、にこにこしながら片づけ始めた。そして最後に「この本はお父さんの大切な本だから、次からは自分の本を使おうね」と話すと「うん」とうなづき、以後、夫の本では遊ばなくなった。

公園の砂場におもちゃの電車を持っていき、友達に「貸して」と言われた時のことである。

私は黙って息子の返事を待っていると、「ボクが終ったらね」と言い、使い終わるとちゃんと手渡していた。友達とケンカをすることもあったが、相手の親がいるからとすぐに止めるのではなく、しばらく見守るように努めた。彼は2歳前であったが、自己抑制心が築かれていった。

娘4歳、息子2歳

夫の転職に伴い、東京から田や畑の多い愛知県西部のこの地にやってきた。家族全員の肩の力が抜けたように思われた。これを機に、皆に優しい生活、皆が楽しめる生活を心掛けた。子ども達自身が生活の主人公となれるように、日常、子どもがよく使う物は全て手の届くところに置いた。高い所の物は台を使えば取れるようにし、洗面所のタオルはズリ落ちないように洗たくばさみでとめ、ポンプ式の液体ソープをやめ、固形の石けんにした。体を洗うタオルも小さいものにし、雑巾、バケツも子供用の小さいものを用意した。食卓の椅子の高さも座布団で調節した。普段、子どもが作業するこたつ机に対しても、娘、息子の体に合わせて、牛乳パックで椅子を作った。物はできるだけリサイクル回収に出したり、再利用したりした。ベランダに花を育て、ハムスターも飼った。包丁も小型のものを用意した。家族全員の生活を一から見直した。丁寧にお手本を見せ、わからない事柄は一緒に本で調べた。娘も息子も「できる」ことが一つずつ増えていった。この時、ついつい完璧を求めてしまって、娘が他人の失敗を許せなくなってしまうこともあったが、原因が私にあることを知り、改めた。

まず「自分がやる」ことを認めてあげて、たとえ5割でも「できた」ことを一緒に喜ぶようにした。この頃、娘は落ちた花びらをすり鉢ですりつぶして汁を取り出し、その汁で絵を書くことを好み、終わった後も、用具を洗って乾かすことまでできるようになった。

娘は愛知江南短大付属幼稚園へ元気よく通い始めた。ところが一つ問題が起こった。人との関係が再びうまくいけなくなったのである。人に自分の考えを押しつけたり、常に自分が優位に立っていなければいけないというこだわりをもつようになった。このような状態が1年程続いた。しかし、彼女は人とすさまじくぶつかり合う中で、それまでの自分に気づき、本来の自分の姿を取り戻そうとしていた。当然のことながら、私とも何度もぶつかりあった。ついついあせって早く結果を出そうと思ったこともあったが、じっくり待つように心掛けた。今では友達とケンカをしたことも話してくれるようになっている。

息子が3歳の時は、週に1度は必ず三輪車で近くの農道を2時間程散歩する習慣がついていた。電車を見たり、畑の農作物が育つ様子を見たりすることを好んだ。家に戻ると私から家の鍵を受け取りドアを開け、手足を洗ってコップを2つ出してくれる。小さい時から自分の自然な発達が妨げられなかった息子は伸々と育ち、他人のことも配慮できるのだろう。

この夏休み、2人に毎日の課題を提案した。娘には畳の部屋をほうきで掃くこと、息子にはベランダの花に水をやることである。娘には、畳には「め」があることを教え「め」に沿って掃くようにとだけ伝えた。ゴミの取り方は本人に任せた。すると畳1枚ごとにゴミを取っており、ちりとりが動かないように壁等で固定してうまくやっていた。息子には水の入ったバケツとじょうろを渡した。暑い日の水は気持ちがいいもので、水を勢いよくかけ楽しんでいたが、水

が隣りの家のベランダにまで流れていることに気づいた。すぐに見本を見せて、なぜ水が流れてはいけないのか説明した。最初は「もうヤダ」と言っていたが、何度かやっているうちに集中してできるようになり、鉢から水があふれだす前に止めることができるようになった。また土が固くなっているものは、水がしみこみにくく、花に元気がないことにも気づき、二人で植えかえたりもした。

このように見てくると、子どもは本来自ら育っていく力があり、一つ一つの特徴的な活動や行動は発達の為の一つのプロセスであると言えるだろう。家庭においては遊びが生活の延長であったり、生活が遊びの延長であったりする。一つだけ違うのは、遊びは途中でやめられるのに対し、生活はやめられないことである。習得し、やり遂げなければならない。その中で、ルールを守る力、粘り強さ、知恵等が培われる。子どもは、発達段階に応じてそれらを自分の中に取り入れ、繰り返し、集中して、達成感、充実感をおぼえ、自我を形成していく。その際に周囲の大人は、子どもの状態をよく観察し、適切な関わりをすることが必要である。しかし、たとえ何らかの原因で発達のステップを踏み外してしまったとしても、幼児期は、その強い発達のエネルギーによって修正することもできる。生活力を身につけることで、自分に自信が付き、周囲に対して心配りができるようになる。遊びの幅も広がって、知的能力も養われる。そして何といてもお互いが気持ちよく楽しくすごすことができるようになることが最大の成果であると思うのである。

5 考察とまとめ

④(1)でみた、幼稚園での実践例では、日常生活活動にいていねいにかかわれる環境と保育者の配慮によって、注意力、集中力、秩序感、順序性、清潔感、独立心、社会性が養われるようすが示されている。人に代行してもらったり、手助けしてもらうのではなく、本当は子どもは自分でできるようになりたい、自分できちんとできるようになりたいと望んでいる存在であることを親や保育者は銘記せねばならないのである。

④(2)でみた、家庭での実践例では、子育ての初期子どもの行動が「感性」や「知性」につながるものに対しては積極的にとり入れていたが、日常生活についてはあまり関心がなく「大人がやった方が早く済む」と考え、子どもの自立要求を抑えてしまったり、人とのかわり方も子どもに発言や行動をまかせたり、子どもの気持ちをたしかめて代弁したりすることをせず、親の思いをおしつけてしまったことが綴られていたが、それは今日、一般的によくみられる親、大人の姿である。そうした中で、長女は自分の要求がかなえられず、イライラしたり泣くことで訴えたりしていたが、親が気づき、対応が受容的になり、親の工夫により生活の中で一つ一つできることも増えていく中で、自我をしっかりと育てていく姿が示されている。しかし、引越により全く新しい集団の一員となり、保育内容も変わる中、自分の友だちとのかわり方について、長女なりにさぐる努力をけんめいに行っている。自分の考えを押しついたり、優位に立つとする姿は、新しい集団に早く自分の存在をみとめてほしいというねがいの4歳児らしい表

幼児の自我形成における遊びと生活活動の意義と内容について

現であったろうし、自由に自分の思いをさらけ出せるようになった姿として、4歳児の子どもの成育の過程としては積極的に受けとめてやってよい段階であったと思われる。4歳児の1年間、友だち、保育者、親との生活の中で、自然なかかわり合いや親しみのもてる友だちもでき、友だちの思いもおしはかることができるようになり、3歳児クラスに弟が入園してくる中、弟への気づきもできるようになり、今は5歳児にふさわしい第二の自我形成もはかられているようである。友だちとのケンカのようにすや原因も親に話せるようになってきているということは、自我と第二の自我を自己内対話で育ててきている姿であろう。

生活活動にとりくむ中で育つ身体的な調整力や精神的な自己抑制、コントロール力の獲得は、①「自分で」という自我意識の強く芽生える時であること、②環境の中の秩序へ強い関心を向けている時であること、③年上のものたちの動き方を何とか学びとろうとしている時であることから、1歳から3歳期が最も自然に身についていくことを再確認したい。

しかし、もしこの時期に十分にとりくませることを逸した場合でも、4歳から6歳の幼児後期のめざましい発達エネルギーの中なら、まだ間に合うことも、小牧氏の家庭での実践からもみることができると思われる。

小学校、中学校、高校、大学と教育の場では、文字・数字を使った抽象的学習が重んじられるが、命のふしぎ、尊さとともに、人間の発達にとって日常生活を大切に、生活活動にしっかりとり組むことの重要性についても、もっと体験的に教えられていく必要があることを痛感する。生活活動の中で育つゆたかな体験にもとづく認識と自己コントロール力は青少年の精神力と道徳性を自然に育んでくれると思うのである。

早さと効率を何より優先させる今の社会の中では、軽視されがちなゆったりゆたかな生活活動のもつ教育力を、幼児期から成人にいたる迄もう一度再認識することが重要になっていると思われるのである。

註

- (註1) 加藤繁美 「自分づくりと保育の構造」 ひとなる書房 1997年。
- (註2) 野原由利子 「早期教育、管理教育、放任教育の批判的検討 - 子どもの自我の発達を視点として - 」 その1 江南女子短期大学紀要 第27号 P.27~34 1998年。同 その2 愛知江南短期大学紀要 第28号 P.103~111 1999年。
- (註3) マリア・モンテッソーリ 「モンテッソーリ・メソッド」 P.95 明治図書 1975年(原典1912年)
- (註4) 前掲書では「清潔・整頓・身体の平衡・会話」(P.97)とわけられている。
マリア・モンテッソーリ 「わたしのハンドブック」 桂幼児教育研究所 1978年(原典1914年)
では「筋肉の教育」として「日常生活のおもな運動、身づくり、家事、園芸の作業、体操、

リズム練習」(P 23)として分けている。

岩田陽子、南昌子、石井昭子「モンテッソーリ教育、理論と実践 2. 日常生活の練習」学
習研究社 1982年 において文中の4分野に分類している。